

◆「中・高連携から高校教育の課題を再認識する」

(進研ニュース VIEW21 1998.4)

中・高連携の取り組みは、高校現場でどのように受け止められているのか。またそこには、どのような克服すべき課題があるのか。今回の事業に参加した福島県立田村高校の青柳嘉一郎校長に伺った。

部会の経験を  
教員間で共有

「中学校と高校のどちらが主体となった交流は、画期的なものだと思います」  
福島県の中・高連携事業は、県内を六つの地区に分けて展開されたが、その1地区の委員長を務めた青柳校長は、1年間の取り組みをこう評価する。

「授業公開にしても、これまで中学校の教師に高校の授業を見せるものは行われても、高校の教師が中学校の授業を観るようなことはなかった。一連の取り組みの成果は、教材観、指導観の擦り合わせができたことでしょう。中学校と高校それぞれがなにを、どんな基準で重要と見なして、どんな教科指導を行っているかを、かい間見ることができたはずです」



福島県立田村高校校長  
**青柳 嘉一郎**  
Aoyagi Kachiro  
田村高校は各学年普通科8クラス、体育科1クラス。田村高校の校長として赴任して最初の1年が過ぎた。「体育科があることで、スポーツの持つ爽快感が、学校内にいい雰囲気をもたらしているなあと感じています」



各都道府県が  
取り組む  
教育改革

福島県

事例紹介

福島県立田村高校

中・高連携から  
高校教育の課題を  
再認識する

田村高校からは国、数、英1名ずつの教師が教科別部会の委員として参加。同校は授業公開の会場でもあった。

「委員は授業公開に向けて、校内各教科の教員同士で指導法について話し合っていました。委員として見聞したこと、それぞれの高校でどう伝えていくかが、今年度以降はさらに問われるでしょう」  
つなぎ教材に関しては、それぞれの

高校で利用法は変わってくるだろうと、青柳校長は考えている。

「高校にしてみれば、つなぎ教材はこれまで教科指導で配慮が足りなかったであろう部分を示唆してくれるものです。当然、高校によつてはこのような教材を必要としないところもあれば、新入生に対して入学後一定期間、つなぎ教材だけで授業を行うといった、思いきった利用を試みるころもあるかもしれません」

求められる指導を  
今一度考える

今回の取り組みは、高校の教師にとつて、高校教育のあり方を今一度考え、試みるきっかけにもなったようだ。

ある高校教師は「中学校の先生から『楽しく、活動的に英語を学んできた生徒が、高校で英語嫌いになるのは当然だと思ふ』といった感想を聞いた。確かに高校にも改善すべき点があるが、現状の大学入試での英語の位置づけを考えると、限られた時間でどうしたら生徒の目標を達成させつつ、なおかつ生徒が楽しみながら考えられる授業ができるのだろうか……」と語っている。本当の意味で、生徒のためになる授業とはなにかを考えた経験となったのではないだろうか。

青柳校長は中・高連携での生活・進路指導の重要性を認識している。

「中・高連携の目標の一つには大学進学率のアップも挙げられますが、それには学力向上以外の要素もあるんです。例えば、本校には経済的理由で進学をあきらめようかという生徒もいます。そのような生徒とその保護者に対しては、奨学金や夜間部などの情報を提供し、励ますことが大切になってきます。生徒の生活状況、成績、そして志望は実に多様ですから、やはり一律の指導では解決しないことを、この取り組みを通して改めて実感しました」  
それぞれに課題を抱える個々の生徒に対して、中・高の教師が学習、生活、進路と多岐に渡って、ともに解決のための支援を行う強固な連携が望まれる。